



腕を發揮していた高畠にとつては鈴木の経営の近代化は急務であるとの信念は固く、よって米騒動を逆手にとらえて「好機来る」の感を西川への電文に乗せたものと考えられる。

第一次世界大戦では、連合国側はドイツのU-ボート、そしてかの有名な巡洋艦エムデンにより連合国側は毎日五万トンの船が沈められ極度な船不足に悩まされ戦争の行方にも暗雲がたれこめていた。高畠はロンドンから日本宛、全ての造船所にフル生産の指示を出すと共に連合国側に未建造の船を売りまくったことは周知の事である。当時船一艘の建造コストはトン当たり五十~六十円、高畠はこれを三百~六百円の売り乙波をかけ正にボロ儲けもよいところであった。高畠は売り先が英國政府といえども鈴木にとっては一介の客に過ぎぬとの心意気で契約に際しては手付金を要求した。はげしい船舶の消耗は連合国側に与えたもう一つの打撃は兵站の麻痺による食糧不足であり、ここで高畠はドイツにU-ボートの目をくらませるという巧妙な方法で小麦を目立たぬボロ船で名も無い港に揚げて巨利を得た。さすがに日本政府も少しは手控えてはどうかと鈴木に横槍を入れたのに対し高畠は「維新以降、日本は欧米各国にうんと儲けさせて来た、今こそこれを取り返すチャンスである」としてはねつけた。併し鈴木は、戦後その利益の半分を「戦時特別利益税」として支払ったのである。

大戦が終わると日本経済は大不況に入り追い討ちを掛けるように関東大震災により日本経済は破滅的打撃を受けた。ワシントン軍縮会議により八・八艦隊の構想が消え、船舶事業を主柱の一つにしていた鈴木の前に暗雲が漂い始めた。

鈴木も今までの拡大戦法が裏目に出でひたすら傘下企業との融通手形で当座をしのぎ、又高畠がロンドンで蓄えてきた貿易取引の利益を

具現化を見ることが出来る。昭和三十年代前半、高畠は陸、海、空にわたる商権の確立が商社の必須目標たるべきとした。『陸』は既に鈴木時代に六十社に余る企業を傘下におさめ、財閥系と肩を並べるに至つた。『海』については既に述べた通り高畠の世界を股にかけたダイナミックな行動は何人もの知る通り、残りは『空』、高畠は元軍務局长陸軍中将原田貞憲を介して当時の在日米軍のロジスティックス（兵站）の最高責任者であつたマーフィー大佐を窓口としてボーイング社と代理店権取得の交渉を開始した。当時の世界航空業界はプロペラ機からジェット機へ移るという大転換期に入り、旅客機ではダグラス社が絶対優勢であつた。ボーイングは元々軍用機が主力であつたが既に707の試作機を製造中であつた。高畠からのアプローチに対し検討の結果、高畠即ち鈴木から日商に至る『海』での実力と実績を高く評価し日商を日本における代理店に指定した。このかけにはボーイング社は高畠の流暢な英語力がものを云つたに違いないと思つ。私事になるが、私の入社当時、山崎秀之さんのすすめで高畠さんの秘書の女性に、少しもてあましていた複雑なコレポンの添削をお願いしたことがある。

秘書室で彼女から高畠さんの古い電報のコピーを見せて貰う機会があり電報は短文であるが相手に対しても意を尽くした言葉と文章構成に全く感心させられたことがある。今日、ボーイングとの取引が将来には社史の序文にあるが、第一に商社の今後は海外資源を目指すべきこと、第二は電算機（当時は未だコンピューターの言葉はポピュラーではなかつた）を思う存分駆使すること、この二点が強調されている。昭和四十三年のことである。

ここで鈴木破綻の発端となつた米騒動について考えるのであるが、米騒動は鈴木の米の買占めによるものでなく、大衆を扇動した当時のマスコミ（右傾朝日新聞）、加えて政争もからんで暴徒化したものである。鈴木が三井、三菱と並んで外米輸入商の指定を受けた時、金子は全社員に対し「この権益を社会公衆の福利に生かすべきこと、一切の商談にかけりを留めざること」を厳命している。又、永井は米騒動が鈴木の買占めによるものでないことを論文にして発表、題して『米価と鈴木商店』は当時の経済学の第一人者であった福田徳三の絶賛するものであつた。

筆法をかえて鈴木の破綻から日商創設への一連の事象を振り返つてみると、少し哲学くさくなるが若かりし頃感銘を受けた学者、田辺元の京都大学での講義録『歴史的現実』（昭和15年刊）を此処に見るように思う。田辺元はこの本では難しく分かりにくく哲學の専門用語を使わず分かりやすい表現法を用いている。彼の云う『歴史的現実』とは歴史は直線的でなく、過去、現在、未来が交互関係にあると言う。歴史は過去から押す力と、未来から決定する力との相反する二つの力が、結び合つて交互相媒介する円環であるという。

この実証例として鈴木の後継者、日商の創設者高畠のボーイング社の代理店権獲得のいきさつをみると、此處に過去鈴木の奥深い商魂の

本稿を終わるに当たり、もう一つ加えおきたいことは、鈴木は過剰投資や経営方策の行き過ぎで破綻したのではない。ましてや世に云う放漫経営による破綻とは類を異にする。高畠がロンドンから送つた電文と日商の創立の間には必然性があると思う。鈴木を歴史的現実として見る限り日商の創立はヘーゲルの弁証法の主要概念であるアウフヘーベン（止揚）と考えるべきであると思う。ボーイングのみならず、その後の日商のインドネシアLNG、又ニフティーやナイキといったユニークな商権は往年の鈴木の源流あればこそ生まれたものと私は思う。鈴木商店を考えるとき、やはり商社は人で成り立つてゐることである。企業が肥大化すると組織弊害が生じ木を見て森を見失うこと、それが破局に至る道は極めて容易である。鈴木の偉大な業績は正に其処に人を得たからであることを文中に具体的に書けたと理解して戴けたであろうか。

昭和十九年に金子直吉はその生涯を閉じた。私が旧制高知高校に入学したのが同じ年である。金子の墓は市街の南を流れる鏡川のほとりの筆山にある。字の示す通りこの山は筆の穂に似た美しい姿を鏡川の川面に映している。戦時中ではあつたが、筆山を横にみて弊衣破帽でこの川のほとりを逍遙したことを見出する。鏡川は浦戸湾にそそぐ。湾口は有名な桂浜である。此處に坂本竜馬の像があり太平洋をにらんでいる。湾口をすれば大阪、東京につづく太平洋、金子直吉も三方山に囲まれた高知より勇躍神戸の鈴木商店に旅立つのである。

文中私の記述や記憶に間違いがあれば容赦願いたい。又本文原稿作成にあたりアドバイス戴いた方々に厚く御礼申し上げる。